

金子みすゞの詩を教材にした地域と連携した学習プログラムの実践

○井上美紀・園山貴之・立川利幸¹⁾、高田浩二²⁾

(¹⁾ 下関市立しものせき水族館, ²⁾ 海と博物館研究所)

下関市立しものせき水族館では、2019 年より新たに地域の教育資源を活用した海洋教育プログラムの構築を開始し、第一弾として山口県出身の童謡詩人であり、1923～1929 年頃に下関市で多くの詩を詠んだ金子みすゞ（以下、みすゞと略す）の詩を教材とした地域の教育資源を活用する新たな海洋教育プログラムを開発・実践した。みすゞの詩は、身の回りの生活や出来事、環境などを多様な視点から表現しているのが特徴であり、海や海の生き物を題材にした作品も多く残っている。このような、みすゞの詩を通して物事や海の生き物について多様な見方があることに気づき、またそれらを学ぶ機会を提供し、さらに詩と海の生き物を繋ぐことで、海の街である下関の地域の魅力を再発見することを目的に、地域の施設やみすゞに関わる人々と連携することにした。本発表ではプログラムや教材の開発・実践内容及び実施前後に行ったアンケート結果を報告する。

プログラムは小学生以上を対象とし 2 日間連続の構成とした。1 日目は海に関するみすゞの詩を紹介し、みすゞの詩において頻繁に表現される「不思議」や「なぞ」をキーワードにして、海や海の生き物について意見を出し合った。詩に登場するツキヒガイやサザエの貝殻やその動画なども教材として活用した。また、魚市場と水族館を参加者と巡り、解説者が詩を手持ちパネルで提示しながら投げかけを繰り返し、詩に出てくる生き物を探すことで参加者が観察したものと詩を通して感じたことを汲み取るようにした。2 日目はみすゞのゆかりの地と詩碑が置かれている散策ルート「金子みすゞ詩の小径」の街歩きをしながら、その周辺でみすゞに関わる活動をしている人々のみすゞへの思いを聞く時間を設けた。プログラムの最後には詩から連想した創作活動を行い、後日、当館で作品展を開催した。さらにそれらの作品は、展示会の終了後に参加者が贈りたい相手へ届くように発送した。

本プログラムは 2019 年 9～11 月までの間 3 回実施し、参加者は延べ 27 名であった。参加者の事後アンケートでは、「(詩から) 視点を変えることのすばらしさを実感した」、「地元でもなかなか歩く事(機会)がない所を案内して頂けて良かった」などの感想があった。またみすゞに関わっている地域の方々からは「地域振興の一助となればよい」という感想もあった。

これらの結果から、海や海の生物に多様な視点を持ち、地域の魅力を再発見するという 2 つの目的を達成し、水族館が新たな地域の教育資源を探し、地域学習のハブの役割の一端を果たせたと考えられる。



詩に出てくる生き物探し



「金子みすゞ詩の小径」周辺の地域の人々との交流



参加者が詩から創作した作品の一部